

18世紀イギリスにおけるコテージの改良

——ナサニエル・ケントとジョン・ウッド

Improvement of the Cottages in the 18th Century Britain

今村 隆 男

Takao IMAMURA

(和歌山大学教育学部英語教室)

2013年10月3日受理

イギリスの都市部から離れて田園地帯を訪れると、散在するコテージが目をつく。19世紀末から20世紀始めに描かれたアリンガム(Helen Allingham)やスタンナード(Lilian Stannard)らの水彩画などによって今日ではイメージが定着しているイギリスのコテージは、田舎での理想的な生活や古き良き時代へのノスタルジアを象徴する典型的な存在であると言えるだろう。ところが、歴史的に見るとイギリスのコテージが目ざされるようになったのは比較的新しく、コテージ論議が盛んになるのは18世紀後半からである。それまでのコテージは、劣悪な状況の労働者用住居であって注目されることはなかったが、当時の社会改革の流れの中でその改良に手がつけられ始めた。本稿では、その先駆けとなった農業の専門家ケント(Nathaniel Kent)と建築家ウッド(John Wood)の2人の提案に焦点を当て、その時代のピクチャレスクの風景観との関わりを踏まえながら、萌芽期のコテージ改良論を検証していきたい。

1) 18世紀後半におけるイギリスのコテージの実情を明らかにする記録の一つとして挙げられるのが、N.ケントが1775年に出版した『土地所有の紳士へのヒント(Hints to Gentlemen of Landed Property)』である。ケントは、当時の農業先進地のフランドルの農法をイギリスに持ち帰って国内で広めることによって農業を推進することに貢献した、18世紀後半の時代を代表する農地管理・農業経営の専門家である。すでに産業革命が始まりかけていたとは言え、ケントの時代は未だ農業がイギリスの基幹産業であり、彼のような農業の専門家の活動の意義は大きかった。彼はロンドンに事務所を置き、様々な顧客と契約をして農業指導を行ったが、その中にはU. プライス(Price)もいたことが知られている。

『土地所有の紳士へのヒント』は、ハチンソン(William Hutchinson)がコテージ・ライフを理想化した『コテージで一週間(A Week at a Cottage: a Pastoral Tale)』と同じ年に出版されているが、その

内容は対照的である。『土地所有の紳士へのヒント』の主な目的は、イギリスの農業の具体的な改良方法を地主たる紳士階級に提言することであり、その内容は、農地の排水をよくすること、囲い込みを進めること、フランドル式或はノーフォーク式の輪作システムを導入すること、そして、農業労働者のためにモデル・コテージを建てること、の4点にまとめられる。本書を通してケントが力説するのは、農業労働者の社会的重要性である。彼は農村部の社会構造を、地主(landlord)である紳士と、地主から土地を借りて農業経営を行う農業家(tenant 或は farmer)、農業家に雇われて実際の労働に従事する労働者(labourer 或は cottager)という三層構造として把握し、これら三者は密接に結びついてはいるが、そのバランスは末端の労働者に著しく不利なものであるとする(259-60)。そして、「パン」しか買えない労働者の窮状を具体的な数字をもって示し、その打開のための努力を彼はこの本の読者たる地主紳士達に強く勧める。注意しないといけないのは、労働者の待遇の改善は、労働者自身のためでもあるが、結局は地主のためになることだとされている点である。労働者が「衣服」や「肉」を買える人間らしい生活をするには「自然の法(laws of nature)と慈愛の絆(ties of humanity)」(263)によって彼らに与えられた権利であるとされるが、決してケントは社会構造の変革まで望んでいるわけではない。ここには、地主達を顧客として仕事をしてきた彼の社会的視野の限界が認められるのではないかと思われる。ともあれ、以上のような前提で、農業を支える貧しい労働者への具体的な支援策が提案され、その一環として彼らの住居の改善が勧告されるのである。

コテージやコテージャーが取り上げられているのは、「コテージの大いなる重要性について(Reflections on the great importance of cottages)」と題する章であるので、ここではこの章を中心に見て行きたい。まずケントは、労働者はイギリス社会の「最も価値あるメンバー」であり、その生活に「できる限り」目を配るのは紳士の責務であるとする(228)。そこで第一に紳

士が考慮すべきは、労働者の住環境であるとするが、具体的なコテージの住居や生活の現状は次のようであると解説される。

The shattered hovels which half the poor of this kingdom are obliged to put up with, is truly affecting to a heart fraught with humanity. Those who condescend to visit these miserable tenements, can testify, that neither health nor decency can be preserved in them. The weather frequently penetrates all parts of them : which must occasion illness of various kinds, particularly agues ; which more frequently visit the children of cottagers than any others, and early shake their constitutions. And it is shocking, that a man, his wife, and half a dozen children should be obliged to lie all in one room together ; and more so, that the wife should have no more private place to be brought to bed in. This description is not exaggerated, offensive as it appear. (229-30)

実際にイギリスの貧困層の半分が住んでいるのは、健康面でも精神面でも受け容れ難い悲惨な「ボロボロのあばらや」であり、「慈悲の心を持った者には本当に痛ましい」と言う。彼が特に問題としているのは、その住居が子供の頃から健康に大きな害を与えていることと、家族全員にたった一つの部屋しか与えられず、特に母親がプライバシーを保てないことである。しかも、「この描写は、不愉快かもしれないが誇張ではないのだ」という彼の最後の言葉は、このようなコテージの実態が読者たる紳士階層には十分に把握されたものではなく、従ってその改善は彼らの責務として認識されてはいなかった可能性もあることを示しているだろう。

本来コテージ(cottage)という言葉は、中世における農奴を意味する“cotter”から来ており、1755年に出されたジョンソン博士(Dr. Johnson)の『英語辞典』では、コテージは“A hut ; a mean habitation”とされている。従って、ケントの言う「ボロボロのあばらや」はコテージの実態を映し出していると言えるだろう。18世紀後半におけるコテージの外観は、スミス(J. T. Smith)の『田園風景について(Remarks on Rural Scenery)』(1797)の挿絵から推測することが可能である。そこに描かれたコテージの姿は、スミスがロンドンの郊外を回って「全てそのままに」スケッチしたものであるが(Smith 10)、それらはまさにケントの言う「ボロボロのあばらや」であることは一目瞭然である。

さて、ケントはこのようにコテージの実態を述べたあと、コテージとコテージの重要性、およびその改善の必要性について、次のように述べる。

...we are apt to look upon cottages as incumbrances, and clogs to our property ; when, in fact, those who occupy them are the very nerves and sinews of agriculture. Nay, I will be bold to aver, that more real advantages flow from cottages, than from any other source. . . . Cottagers are indisputably the most beneficial race of people we have : they are bred up in greater simplicity ; live more primitive lives, more free from vice and debauchery, than any other set of men of the lower class ; and are best formed, and enabled to sustain the hardships of war, and other laborious services. (230-1)

通常考えられているようにコテージは社会の厄介ものや邪魔なものではなく、真の利益の源泉であると言う。そして、質素な生活に慣れたコテージは悪徳や放蕩には縁がなく、戦争などの際には国家の重要な支えとなるとされているが、ここにはハチンソンが理想化した人々が再び登場していると言える。しかし、ケントが吐露してしまっているように、彼らは国家の主役ではなく、自らを犠牲にして国家を下から支えるがゆえに、大切にされなければならないのである。農業の専門家であるケントは、コテージ達の実態を知った上で、理想化することなく、旧来の階級社会の枠組みの中で彼らの生活改善の必要性を訴えているわけである。もう一点、注意すべきことは、ここで言うコテージとは田園部に住んで農業に従事している人々のことであり、その他の「下層階級の人々」とは区別されている点である。つまりケントは社会全体の貧困問題を訴えているのではなく、その視野に入っているのは彼が国を支えていると考えていた農業労働者だけであったのである。なぜなら、農民以外の「下層階級の人々」は、国家に「利益をもたらす人々」ではないとされるからである。

コテージの待遇の改善を訴えたのに続いてケントは、コテージに関して次のように改良案を示す。

I am far from wishing to see the cottage improved, or augmented so as to make it fine, or expensive ; no matter how plain it is, provided it be tight and convenient, All that is requisite, is a warm comfortable plain room, for the poor inhabitants to eat their morsel in, an oven to bake their bread, a little receptacle for their small beer and provision, and two wholesome lodging apartments, one for the man and his wife, and another for his children. (232)

コテージは小さくて便利であれば、いくら質素であっ

てもかまわず、「立派(fine)で贅沢」にすることが「改良」ではないと言う。必要なものは「暖かく快適で簡素な部屋」だけであり、その部屋については居間と2つの寝室は設けることという必要最小限の条件になっている。以下に建物の解説が続くが、その内容は部屋の大きさや壁や柱のサイズ、素材の耐久性と経済性など、実用一辺倒になっており、建物の美観については「立派で贅沢」でないこと以外、ここでは何も要求されてはいない。そしてケントは、この建物に次のようなコテージ・ガーデンを付けることを勧める。

To each of these comfortable habitations should be added half an acre of land. . . . This quantity of land would be of great use to a poor family, in the produce of a little fruit, and vegetables of different sorts ; and would assist them likewise in keeping a pig ; as they might, and would raise more potatoes and carrots upon such a spot, than would be sufficient for their own consumption. (234-5)

これだけの庭があれば、ジャガイモや人参やフルーツを植え、豚1頭を飼うことが可能になり、余った野菜は売ることができると彼は言う。半エーカーというこの庭の広さや、そこにあるべき物が野菜や家畜とされていることを考えると、これはコテージ・ガーデンというよりも実際には殆ど畑に近いが、ケントはこれを「庭地」(本文では“the half acre of garden-ground” 235)と呼んでいる。OEDによると、“garden”という言葉の意味は“enclosed piece of ground devoted to the cultivation of flowers, fruit or vegetables” (OED “garden” sb.1)となっていて多義的な解釈が可能であり、様々な種類の庭を許容しうるものとなっている。ここでケントが言う「庭地」は、花や美観といった非実用的な要素を完全に排除した、のちの「割当地(allotment)」に近い庭であると言えるだろう。

続いてケントは、コテージの立地についても注文している。彼は、農場や領主の敷地のゲートの近く、すなわち目につきやすいところにコテージを建てるのが望ましいとする。なぜなら、目立つところにみすばらしい建物があれば領主の「偉大なる恥」になるので、彼らは見苦しくないコテージを建てざるを得ないし、逆に好ましい外観のコテージがあれば、それは「有用性と装飾性」(238)の両方に貢献するからである。有用性と共にコテージの視覚的外観もここで問題にされているが、決してそれは華美やピクチャレスク美を目指しているわけではなく、領主の面目を潰さない程度の最低限のこざれいさが要求されているだけなのだ。そして、以上のような改良を行えば、労働者は勤勉になって当然であると彼は言う。この背景には、もし地主が領地の住環境の改善を行えば、周辺地から貧民が集

まってくるため地主が払うべき地域の貧民税が上昇するという危惧がある。しかし、ケントの提案はそれに対する正面からの反論となっているのである。

このようなコテージ論議を踏まえてケントは提案するコテージの図面を掲載しているが、それらは極めてシンプルな構造の質素なものとなっており、スコットやナイトらが描いたコテージ像やそのイメージを基に実際に建てられた装飾用コテージとは、全く異なる観点から構想されたものであることは明白である。ケントの提案は、地主の社会的責任を強調しながらも、できるだけ彼らの負担を少なくして実現可能なものを目指したものであると言えるだろう。ケントの『土地所有の紳士へのヒント』は、モデルとなるコテージの図面を掲載した最初の書物であり、立面図と平面図の他、具体的な寸法や各材料の価格の詳細な見積もりまで書かれており、平面図にはそれぞれの部屋の役割が細かに記入されている、極めて具体的、実用的なものである。ケント以前にも建築物のパターン・ブックは存在したが、それらは田園で実際に働く労働者のために建てる小さなコテージではなく、彼らの使用者である農場主や地所全体の所有者用の、ヴィラ等と呼ばれる比較的大規模な建物を取り扱っているものばかりであった。このあと、ケントに刺激されて小規模のコテージをも含めた様々なパターン・ブックが出版されてゆくことになる。

2) ケントの改革案と共通する趣旨のコテージのパターン・ブックの代表的な例が、1781年に出版されたウッドの『労働者の住居(A Series of Plans for Cottages or Habitations of the Labourer)』である。同名の父親と共に著名な建築家だったウッドは、1760~70年代には故郷のバースの町を代表するザ・サーカス(the Circus、設計は父親)やロイヤル・クレセント(the Royal Crescent)といった壮大なパラディオ様式の建築で名を残している。しかし本人の説明によると、そのあとの1777年の夏に地主達と労働者の住居の荒廃について話をしたことから、小さなコテージにも関心を寄せることになったという。ウッドによれば、コテージの住人、すなわちコテージャーは「(イギリス社会にとって)有益で必要な階級の人々」であるにも関わらず、彼らの住むコテージの現状は「森の獣の避難場所にも値しない」悲惨なものである。それゆえ、彼らの住居の改善は、「土地財産を持つ全ての人々の注意に値する」重大事項とされる(1-2)。この主張には、明らかにケントと響き合うものがあるだろう。しかし、ウッドの目は田園部の農業労働者のみならず、都市部に住む様々な職業の貧しい労働者や、さらには社会的弱者にも向けられており、ここにはケントとの違いが見出せる。そして、労働者の悲惨な住居の改善のため、ウッドはコテージャー自身の立場にたつことが必要であ

ると考え、自らコテージを訪れて直接に聞き取り調査を行い、何が問題であってそれをどのように変えればよいのかを考えて、具体的な提案をするのである。

まず彼は、現状のコテージの問題点を、1) 立地が悪いための湿気過多、2) 壁が薄かったり玄関がないことによるプライバシーの欠如、3) 部屋数が足らなかつたり、階段が急すぎたりといった不便さ、4) 天井や屋根がまともに機能せず、冬寒く夏暑いという不快さ、の4点にまとめる。その上でウッドは、これら4つの問題を解決する具体的方策を打ち出してゆく。これらの問題以外の点に関する彼の提案の中で興味深いのは、2戸をくっつけて、すなわち現在のセミデタッチトと同じ形にして、住民が病気の際等に互いに助け合えるようにしたり、丈夫な素材を選んで経済性を高めることなどを彼が薦めていることである。またウッドは、同様に経済性を重視する観点から、その地域の石材を使うことにこだわり、費用の計算をする際には、彼の地元のバース近郊の石材を使うという想定で材料費と労賃の数字を並べている。

このあと、具体的なコテージのプランが、部屋数によって「4クラス」に分けて図面とその解説と共に提示されてゆく。最も小さいものは、面積約10平方メートルで天井の高さが2.25mの極めてシンプルな部屋が一つあるだけのコテージ(Class the First, Plate I, Number 1)であり、そこから、このような部屋をいくつか集めただけの構造の装飾性のない単純な外観のコテージが順次、展開されてゆく。ウッドが特に重視しているのは衛生上の問題で、当時はまだファームハウスにも珍しかったトイレを殆どのコテージに設け、下水管には蓋をすることも求めている。また彼は、建物の大きさに応じたサイズの庭を全てのコテージに与えることも提案しているが、この本は建築のパターン・ブックのためか、庭の使い方については何も記されていない。

特徴的であるのは、ウッドがそれぞれのコテージについて、ふさわしい住民像を想定していることであろう。その中には、住民の職業を考慮して設計したものもある。一例を挙げると、自宅で織物労働などに従事する者のコテージには北側から強い光が入るように、などの配慮が記されている。また、社会的弱者を住民に想定したコテージも少なからずある。彼が対象にしているのは、教区から生活保護を受けている人々や、世話を委ねられた孤児が自分の子供以外に2～3人いる寡婦などである。また、仕事ができない体の住民のための長屋には、彼らを「指導する(superintend)」教区役人のための部屋も置かれているなど、貧困対策の原型がここには見出せる。ウッドの『労働者の住居』は、地主による領地の改良と人道的な社会改革とを結びつけた最初であるとモールドィンは言うが、本稿で述べたように、ケントらの前例は明らかであるだろう。

しかし、その貧困対策はケントと同じように労働者の勤勉が前提になっているのではなく、働きたくても難しい状況に置かれた社会的弱者をも念頭においた提案を行っているという意味で、ウッドの主張には明らかな革新性があると言えるだろう(Mauldin 14)。

ともかく、以上のようにウッドが提案しているコテージは極めて実用的な観点から考案されたものであると言えるが、コテージの外観について彼はどのように考えているのであろうか。

As a piece of economy, cottages should be built strong, and with the best of materials, and these materials well put together, the mortar must be well tempered and mixed, and lime not spared: hollow walls bring on decay, and harbour vermin, and bad sappy timber soon reduces the cottage to a ruinous state; although I would by no means have these cottages fine, yet I recommend regularity, which is beauty; regularity will render them ornaments to the country, instead of their being as at present disagreeable objects. (6)

素材に関して彼が重視するのは耐久性で、堅固な建材でコテージを造り「廃墟化した状態」にならないようにすることを彼は主張しており、「立派な(fine)」外観にする必要は全くないと言う。彼が美しいとする唯一の要素は建物の「規則性(regularity)」であり、規則的であればそのコテージは地域の「装飾」となると言う。このパターン・ブックに掲載された図面は徹底して簡素なものばかりであるが、その簡素さの中でも「規則性」を尊重するウッドの主張には新古典主義の様式を得意とする、1728年生まれという一世代前の建築家としてのこだわりが認められると言えるだろう。左右対称であることを尊重するウッドは、規則性を演出するためだけの偽窓(blind window)や偽扉をつけている。「規則性は美だ」というこのようなウッドの主張は、不規則性や多様性を重視するピクチャレスク的美観とは相容れないものであり、ピクチャレスクの流行の高まりと共に主流の考えではなくなっていった。

ケントやウッドが奨励している簡素で実用的、そして建築費用のかからないコテージは、リボン状開発の規格型のコテージも含めて、実際に住居用として18世紀の後半に社会対策の一環として建てられ始めたものである。これは、当時のピクチャレスク趣味の理想の中で描かれたコテージ、すなわち上述のスミスがスケッチのモデルとして紹介したコテージや、同様の目的で富裕層が庭園内に娯楽のために建てた装飾用コテージとは全く種類を異にする。つまり、18世紀後半のコテージの方向性は、富裕層のための装飾用と貧困層の

ための実用の2つがあったということになるだろう。ただし、実際に新たに建てられたコテージとしては後者が多かったはずである。このような18世紀後半のコテージをめぐる二つの方向性は、間もなく接近し始め、互いに刺激し合いながらコテージの改良を推し進めて行ったものと考えられるが、19世紀以降のその展開については稿を改めたい。

Bibliography

- Kent, Nathaniel. *Hints to Gentlemen of Landed Property*. 1775.
- Maudlin, Daniel. “Habitations of the Labourer: Improvement, Reform and the Neoclassical Cottage in Eighteenth-Century Britain.” *Design History*, 23:1. 2010.
- Wood, John. *A Series of Plans for Cottages or Habitations of the Labourer*. 1781.
- 高橋 裕一、「一八世紀後期イングランドに見る所領管理「専門職」——ナサニエル・ケントの場合——」、『史学』64(1), 55-86, 1994.